

上海地区の航空戦力が強化される

漢和防務評論 20150602 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国は、上海地区の航空戦力を強化しています。
この地区は東シナ海を中心に面し、東シナ海における航空作戦の重要基地が点在しています。中国は、この基地群を東シナ海における対日米作戦の策源地とし、作戦準備を着々と進めています。最前面にある上海市崇明島の基地には第3世代戦闘機と早期警戒機 KJ-200 及び KJ-2000 が待機しています。

KDR バンコク特電：

中国江蘇省無錫基地に駐屯している KJ-200 型早期警戒・指揮・電子戦機部隊が強化されつつある。無錫基地に所在する航空兵第26師団の KJ-200 型機及びその他の電子戦機は、2013 年から 2014 年にかけて 7 機から 9 機へと 2 機増加した。KJ-2000 型戦略早期警戒機の数はいまだとして 4 機である。このことは、KJ-200 の就役機数が今後ますます増加するとともに、性能向上のため逐次グレードアップされることを示す。新時代の KJ-500 型早期警戒機も間もなく登場するであろう。KDR の観察によると、第3世代戦闘機部隊が行う空軍の演習には必ず KJ-200 系列の早期警戒機が参加している。特に J-10、SU-30、J-11B 等の第3世代戦闘機を有する部隊の多くは、根拠飛行場に少なくとも 1 乃至 2 機の KJ-200 を駐屯させている。

中国空軍は、南京軍区の長江三角州に所在する早期警戒、爆撃、攻撃及び迎撃作戦のための戦力を大幅に強化した。これは明らかに沖縄に所在する日米作戦部隊に対抗するためである。これと同時に、2013 年から蘇州に多くの J-8F 型偵察機と J-6 型無人偵察機が配備されているのが確認された。上海を中心とする、長江三角州地区は、すでに中国空軍の最も強力な戦力集結地となった。この地区の日本からの距離は、九州の最も近いところで 820KM、沖縄から 780KM である。将来の台湾海峡の戦いにおいて長江三角州に所在する空軍戦力の主要任務は、日本の海上、航空自衛隊による台湾支援のための南下を阻止するにある。

主要な精鋭戦闘機、爆撃機、攻撃機は全て、無錫、南京、上海を中心とする長江三角州に集中している。この地区の第3世代戦闘機の集中密度は、北京、天津の首都地区よりも高い。

第一、上海第一線の沿海地区に海軍航空兵第4師団第10連隊の最精鋭 SU-30MK2 (寧波) が駐屯している。SU-30MK2 の作戦半径は 1500KM で、行動範囲は本州の一部と沖縄全体を含む。

JH-7A 戦闘爆撃機 4 個連隊は、J-H7/7A 型の機数が全部で 96 機あり、それぞれ上海大場、義烏 (海軍航空兵第6師団)、嘉興、杭州 (航空兵第28師団) に配備され、

沖縄及び九州への地上攻撃、対艦船攻撃能力が大幅に強化された。嘉興には最新型 Q-5 攻撃機が少なくとも 1 個連隊配備されている。

防空のための迎撃戦力は、長興に駐屯する航空兵第 3 師団の J-10 連隊、蕪湖に駐屯する SU-30MKK 連隊、崇明島に駐屯する航空兵第 26 師団の J-8II 連隊及び路橋に駐屯する海軍航空兵第 4 師団の J-10 連隊が担っている。2013 年以来、實際上崇明島には、SU-27 及び J-11 部隊が頻繁に進駐している。しかし J-8II の機数は、12 機以下であり、この基地は機動展開用の基地である可能性が高い。この地区では、J-11 と KJ-200 及び KJ-2000 の飛行が頻繁に見られる。長興は上海からの距離が 160KM、蕪湖は 288KM、路橋は 290KM、義烏は 250KM である。したがって上海地区の空軍及び海軍航空兵部隊の即応態勢は、沿海地域で最強と言える。また上海からの距離が 351 KM の衢州には、航空兵第 29 師団の SU-30MKK 連隊が駐屯している。言わば、長江三角州には 2 個連隊の SU-30MKK が集中している。しかし各連隊の保有機数は 19 機どまりの特殊編制である。その理由は、SU-30MKK の総機数は 76 機しかなく、それを 3 個の連隊と戦術訓練センターに分割しなければならないためだ。西外には J-10A が 2 個連隊駐屯し、防空迎撃任務に就いている。この巨大な迎撃、攻撃作戦機隊の要は 3 個連隊の H-6 爆撃機である。第一に、安慶の航空兵第 10 師団である。ここでは大規模な飛行場改修が行われている。KDR の推測では、間もなく H-6K が進駐する。安慶は上海からの距離が 410KM である。長剣 10 型巡航ミサイルの射程は 1500KM 以上である。H-6K が沖縄及び台湾の全土、九州、四国の全部、及び日本本州一部を長剣 10 で攻撃するには、上海と安慶の間を巡航する間に攻撃すればよい。

また南京及び常州には、航空兵第 10 師団のそのほかの H-6 型機 2 個連隊が配備されている。南京には 36 機、常州には 12 機である。このように航空兵第 10 師団だけでも巨大な攻撃戦力を形成している。H-6H が装備する YJ-63 型巡航ミサイルは射程が 200KM 以上である。

この地区の空軍戦力は更に強化されつつある。2014 年には新たに一連の飛行場が建設された。その中には南京北方 34KM に建設された新設飛行場が含まれる。

一部の第 3 世代戦闘機連隊は、旅団に改編され、独立作戦が出来る能力が強化された。長江三角州の軍用飛行場の密度は相当高く、平均して 250KM 毎に 1 つの軍用飛行場がある。そのうち蘇州、長興、安慶、義烏、肥東基地は地下化された。

地下式格納庫は通常 2 個の出口がある。路橋、衢州、寧波基地には相当堅固な強化型格納庫が建設された。上述の飛行場には聯体式格納庫（訳者注：ハモニカ式）が建設されている。施設が最も劣るのは崇明飛行場であり作戦機は全て野外係留されている。

以上